

氏名	石渕 理恵子
学位の種類	博士（人間文化科学）
学位記番号	甲第人 22 号
学位授与年月日	2020（令和 2）年 3 月 17 日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第 3 条第 3 項第 1 号
学位論文題目	Passions, Authorship and Gender in Early Modern Women Writers : Focusing on Mary Sidney Wroth 英国初期近代女性作家における熱情、作家性とジェンダー—メアリー・シドニー・ロウスに焦点を当てて—
論文審査委員	主査 教授 Kleitz, Dorsey 副査 教授 本合 陽 副査 東北大学名誉教授 原 英一 副査 東京女子大学名誉教授 楠 明子 副査 立教大学文学部教授 岩田 美喜

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

### I. 論文内容の要旨

本論文は、初期近代すなわちイギリス・ルネサンス期の女性作家たち、とくにメアリー・シドニー・ロウス(Mary Sidney Wroth, 1587-1651)を中心として取り上げ、「情熱 (passion)」、「著者性 (authorship)」、及び「ジェンダー (gender)」の観点から詳細なテキスト分析を行うことにより、これらの作家たちの多様性を明らかにし、歴史的位置づけを再検討したものである。初期近代の女性作家たちは、1970 年代から隆盛したフェミニズム批評が 19 世紀および 20 世紀の小説を中心に展開する中で、当初はほとんど無視されていた。しかし、研究の進展とともに、シェイクスピア(William Shakespeare)やベン・ジョンソン(Ben Jonson)などの男性作家の陰に隠れて知られて

いなかった多くの女性作家とその作品が発掘されていくにしたがい、彼女たちの存在の大きさが浮かび上がってきた。現在、イギリス初期近代の女性作家たちの著作活動の研究では、女性としての等質性より、むしろその豊かな多様性が注目されている。したがって彼女たちが活動していた、さまざまな社会的コンテキストや文化的ネットワークを解明することが課題となっている。メアリ・ロウスは、初期近代の女性作家を代表する存在であるが、彼女の作品の中にも多様性があり、その解明が文学史の大きな動きに新たな光を当てると期待される。

本論文では、ロウスの代表作である長大な散文ロマンス、『ユーレイニア』(*Urania*, volume I 1621, volume II 1999)について、文体論、ジェンダー論、ジャンル論、さらにはテキスト分析の手法を駆使した多角的な検討を徹底的に行い、その多様性及び初期近代の女性による文学の歴史的な位置づけと意義とが深く追求されている。重要なポイントは、ロウスによる「情熱 (passion)」の表現である。初期近代の女性たちは、「貞淑」、「沈黙」、「従順」が女性の美德であるとする社会規範の重圧の下にあり、「情熱」を表現することはそのような規範に対する叛逆であった。さらに、作家としての女性は、「書くこと」、「著者たること」に必然的に伴う社会的批判にさらされることになる。本論文は、ロウスをはじめとする女性作家たちの葛藤の詳細な検討を行うことにより、初期近代の文学と文化を問い直すものである。

## II. 審査の結果の要旨

### 1. 論文の構成

本論文は、イントロダクション、5章からなる本論、および結論から構成されている。

イントロダクションでは、イギリス初期近代の女性文学についての先行研究の概略が述べられ、現在はその「多様性」が研究の中心であることが示される。さらに、「情熱 (passion)」、「情動 (affection)」といった基本概念の定義が行われる。初期近代イングランドにおける「著者性 (authorship)」の問題が提示され、メアリ・ロウスの伝記が大まかに紹介されている。

第1章、“Voice between Speech and Silence: Sighs, Whispers, and Aposiopeses,” (「ことばと沈黙の間の声：ため息、ささやき、頓絶法」) では、ロウスや彼女に先行する、あるいは同時代の作家たち、フィリップ・シドニー (Philip Sidney) やシェイクスピアの作品に見られる、ため息やささやきなどの「サブヴァーバルな (言語下的、準言

語的) 声 (subverbal forms of voice) 」及び修辞学でいう頓絶法 (aposiopesis) に、ジェンダーがいかに関わるかを論じている。これらの「声」は、センテンスとして不完全であるにもかかわらず、「情熱」の表現として雄弁である。ここでは、これら「ことばと沈黙の中間に位置する声」が、「声と沈黙」、「男性と女性」、「生と死」、「積極性と遠慮」、「現在と未来」といった二項対立を曖昧にしていることが論じられる。とりわけ、ロウスの作品において、女性キャラクターたちによって用いられるこれらの「サブヴァーバルな声」が著者性の構築に寄与することが指摘されている。

第2章、“Eloquence and Education in the Works of Wroth, Shakespeare, and Jonson” (「シェイクスピアとジョンソンの作品における雄弁と教育」)では、ロウスの作品での雄弁、教育、そしてジェンダーの相互作用の問題を、先行する作家としてのシェイクスピア及び同時代作家であるベン・ジョンソンとの比較によって検討している。貴族階級のインテリ家系に生まれ育ったロウス自身は高度の教育を受けていたが、初期近代の女性の教育は、一般的には彼女たちを美德ある娘、妻そして母とするという文化的目標達成の範囲に限定されていた。この章では、ロウスが、女性の教育と雄弁について、シェイクスピアやジョンソンなどの男性作家とは異なる見解を表現していることを論じている。

第3章、“Measuring Passions: Poetic Forms, Linguistic Styles and Female Complaint” (「情熱の韻律化：詩型、文体および女性の嘆き」)では、ロウスによる文学形式の選択と女性の内的感情の表現を研究することにより、著者性の問題を追及している。『ユーレイニア第1部』に見られる女性詩人たちの表象と彼女たちによる詩型の選択及び「女性の嘆き」という伝統的トポスの使用に焦点が当てられる。本章では、男性や女性のキャラクターたちが感情を揺さぶられる際に示す不可視で非実体的な情熱に、ロウスが作家としていか「声」を与えたかを検討している。技巧が劣る女性詩人たちが、彼女たちの社会的地位にふさわしい形式で情熱を表現することに失敗している様を、ロウスがいかにか描き出すかの分析も行われている。

第4章、“Male Tears and Masculinity: *Urania*, *The Winter's Tale* and Early Modern Romances” (「男性の涙と男性性：『ユーレイニア』、『冬物語』、初期近代ロマンス」)は、ロウスの『ユーレイニア』と男性作家の手になる初期近代ロマンスにおける男性の涙、情熱、及び男性性の概念の相互作用を探求している。本章では、『ユーレイニア』に登場する男性主人公、アンフィランサス (Amphilanthus) の両義性が分析される。彼は男性性の理想を体現する者でありながら、作中では最もしばしば涙にくれる人物である。アンフィランサスの涙の描

写は、シドニーの『アーケイディア』(Arcadia)、スペンサー (Edmund Spenser) の『妖精の女王』(The Faerie Queene)、シェイクスピアの『冬物語』(The Winter's Tale) に登場する男性キャラクターとの比較によって検討される。その結果、ロマンス的關係性の中での過ちを浄化する過程と、涙を流して嘆くことによるキャラクターたちの心理的成長が示されると論じている。

第5章、“Editing as a Form of Authorship: Wroth’s Revision of *Pamphilia to Amphilanthus*” (「著者性の一形態としての編集作業：ロウスによる『パンフィリアからアンフィランサスへ』の改訂」) は、ロウスによる編集作業が著者性の創造的一形態であることを論じている。ロウスの著者性は、初期近代女性作家たちの文学活動の範囲を超越するものであったが、彼女の作品には、当時の先駆的女性作家として彼女が直面していたディレンマが現れている。このことを、女性キャラクターたちの編集作業の場面を描くロウスの表現に焦点をあてて論じている。この章では、ロウスのソネット集『パンフィリアからアンフィランサスへ』(*Pamphilia to Amphilanthus*) の手稿に見られる自己検閲の痕跡についての精査も行われている。

結論では、論文本体の議論の要点を要約し、ロウスの著作は著者性が初期近代女性作家の「多様性」を表すことを示し、その上で、今後研究すべき領域を示唆し、さらに、日本における研究のコンテクストの中で、本論文の位置づけを述べている。論文の末尾には、44 ページにわたる膨大な参考文献目録が付けられている。

## 2. 論文の特徴

本論文のまず挙げられるべき特徴は、広大で深い文献リサーチを基盤としていることである。メアリ・ロウスをはじめとするイギリス初期近代の女性作家の作品は、男性中心のイギリス文学史の中で長い間無視されてきたために、資料が圧倒的に乏しかった。1970年代以降のフェミニズム批評の隆盛により、19世紀以降の作家たち、たとえばシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë)、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë)、ジョージ・エリオット (George Eliot)、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) などの再評価が大きく進んだが、初期近代の女性作家研究は遅れていた。その要因は、初期近代には「貞淑」、「寡黙」、「従順」が女性の美德とされていたために、「ものを書く」という行為自体が、女性のあり方に反するとされたからである。ましてや作品の出版は、あらゆる規程からの逸脱であった。ちなみに、ロウスの『ユーレイニア』は、女性作

家によるロマンスとして史上最初の出版である。1990年代以降は、このように沈黙し隠されていた女性作家たちが、先行する研究者たちによって発掘され、正当な評価を与えられるようになり、資料も比較的容易に入手できる状況となっていた。その結果、初期近代の女性作家による文学に、豊かな多様性が見られることが注目されるに至っている。本論文は、現代フェミニズム文学批評の軌跡を詳細に追った上で、整えられてきた手稿などの一次資料までを丹念に渉猟して研究を行ったものであり、先駆的意義を有する。

もう一つの特徴は、修辞学の用語を駆使して文体論的分析を行い、そのような緻密なテキスト分析と文化的リサーチを巧みに融合させていることである。本論文が主題とする「情熱 (passion)」の表出は、初期近代の女性作家にとって、社会規範に対する挑戦であるがゆえに、特有の困難を伴った。それが、「ことばと沈黙との境界にある声」として表現される。噸絶法、前辞反復 (anadiplosis)、句またがり (enjambment)、再構成 (置き換え) (metaphrasis) といった修辞法がロウスの作品で多用されるのは、女性が置かれた文化的背景によって理解されるのである。

### 3. 論文の評価

メアリ・ロウスの長大な散文ロマンス『ユーレイニア』が出版されたのは1621年である。男性作家によるロマンスの主要な作品、シドニーの『アーケイディア』(1590) やスペンサーの『妖精の女王』(1589-96) よりもかなり遅く、ロマンスというジャンルの流行がすでに終わりつつあった時代である。本論文によれば、このような「遅れ」は、ロウスにとって有利に働いた。遅れて登場したことによりロウスは、男性作家が手がけた先行するジャンルや作品を作り替え、再利用し、再構成するための大きな余裕あるいは機会を与えられたのだ。その結果、最終的には男性作家による作品をさまざまな形で変革し、新しい時代の文学、すなわち「鍵ロマン (roman à clef)」、さらにリアリズム小説への道を切り開いたのである。本論文はこのことを、膨大な一次資料および二次資料を駆使し、さらに綿密な文体論的分析を行って実証した。

議論の根底には、20世紀の文化人類学者ターナー (Victor Turner) の「境界性 (liminality)」や哲学者デリダ (Jacques Derrida) の「差延 (différance)」の概念があるが、17世紀の文学研究にこれらを援用するにあたり、いたずらに現代の理論に引きずられることなく、歴史主義に堅固に立脚して論を展開している。画一的なフェミニス

ト批評・研究ではなく、文体論、ジャンル論、文化論を体系的、融合的に展開した本論文は、ロウスとその他の初期近代の女性作家たちの研究に、新たな局面を切り開いたものと評価できる。

論文全体を貫く一貫したテーマ性にやや弱い点がなくはないが、個々の章における上記の評価により、本論文は課程博士の学位認定の水準に充分に達しているとみなされる。

#### 4. 最終試験の概要

2020年1月24日(金)午後3時から4時15分まで、公開形式の最終試験が実施された。学位申請者による論文の概要・意義についての発表が行なわれ、審査委員および出席した一般聴衆からの質疑、それに対する応答がなされた。論文の構成や内容、また背景にある文学史的知識や理論に関し様々な質問があったが、そのひとつひとつに丁寧かつ誠実に答えていた。その後別室に移動し、午後4時30分から午後6時過ぎまで、審査委員(学外審査委員3名を含む5名)により、論文の全体および細部について詳細な質疑応答が行なわれた。その後の審査委員による協議の結果、委員全員の一致により、論文内容について合格と認定された。

外国語(フランス語)については、同じく1月24日(金)午前11時から正午に筆答試験が行なわれた。その結果、申請者は外国語についても十分な学力があると判断された。

以上を総合して、最終試験の判定を合格とした。